

座長：古賀 一成 (JCHO熊本総合病院 副院長)

## 「熊本総合病院病床管理ソフト」を活用した 効果的なベッドコントロールの実際

JCHO 熊本総合病院 看護部 看護部長

瀬高 香澄

熊本総合病院は、昨年開院70周年を迎えたが、以前の経営状態は慢性的に悪く7億円の負債を抱えていた。2006年に現病院長が就任し改革を行った結果、JCHOグループトップクラスの黒字病院となった。

慢性的な経営不振解消のため最も力を注いだ経営戦略は「高い病床利用率の維持」である。当時、急性期病院では看護配置7対1変換が主流であり、全社連本部からも7対1にするよう強制的な指示があった。しかし、敢えて10対1を堅持したのは、7対1との比較シミュレーションから10対1の高い病床利用率維持の方が明らかに収益増であったからである。

当院では、病院長就任時から毎朝、医師・看護師長・部課長が集まるカンファレンスの中で、病院長の一言と夜間救急入院患者情報や入退院予定数を示し、ベッドコントロールを行う。そのホワイトボードに記載した週間入退院予定表が熊本総合病院病床管理ソフトの原型である。その結果、わずか2ヶ月で黒字化し2年後には累積赤字も解消し、爾来、多額の黒字累積ができ5年後には新病院建設を行った。

新病院移転を機に、SE職員にソフト開発を依頼した結果、アナログのホワイトボードから極めて便利な「熊本総合病院病床管理ソフト」に変貌した。

2014年にJCHOの一員となったが、98%前後の高い病床利用率維持で黒字の反面、看護師は疲弊しインシデントも増加してきた。そこで、その回避のために、2018年度に看護師50名を採用ができたことから、自然・必然的に7対1に移行した。

7対1移行後は、さらに細やかなベッドコントロールの必要性が増し、医師や多職種との情報共有が欠かせなくなった。必要となる診療科別・病棟別の在院患者数と空床状況、DPC等の要望に応え、熊本総合病院病床管理ソフトを漸次バージョンアップさせてきた。

そして、今年度にはJCHO九州地区病院全てと全国数カ所に当ソフトを提供したが、病床利用率向上に寄与しているのではと思われる。

共催：JCHO熊本総合病院